



Title : 貸出冊数を考える

❖貸出冊数5冊は少数派

先月秋田市で開かれた県内図書館団体の会議でのこと。中で事例発表が2件あり、そのひとつ能代市立図書館は、今年度から鹿角市立図書館とともに指定管理者制度を導入しています。

能代は元々評判の良い図書館なのですが、指定管理になると毎年評価にさらされますから、目に見える成果を出すため新たなイベントに取り組めます。大館でもやりたいね、と話し合っていたあるイベントが先を越されてしまいました。悔しい思いはありますが、今年度の当館は諸般の事情で新事業を行う余裕がなく、来年度回しにするしかありません。子どもたちに喜んでもらえるイベントを、来年度はきっとやりますからお楽しみに。

それはともかく、能代も鹿角も指定管理への移行を機に、貸出冊数の上限をアップしました。これまで県北の図書館はどこも5冊まででしたが、両館が10冊にしたため、県内13の市立図書館で上限5冊は大館市と北秋田市だけになってしまいました。

実は何年前か前、県立図書館から各市町村図書館への貸出冊数アップの働きかけに呼応して、県南・県央の各館では大部分が上限10冊に変更したという経緯があります。県北が乗り遅れたのは、ただでさえ新刊の予約待ちが多い状況が更に悪化するという懸念があったようです。当館で2年前に冊数増を打診した際も最初にそれを言われました。次に書架がスカスカにならないかというもの。実はどちらも取りこし苦労です。ベストセラーの予約待ちは、貸出期間が同じなら待つ期間も変わらないはず。書架がスカスカになったら、閉架書庫に収まりきれずに床積みになっている本をいくらでも補充できます。図書館の本は開架書庫の、つまり利用者の目に見えているものだけではないのです。

県立図書館が貸出冊数増を働きかけたのは、県内公共図書館の人口当たり貸出冊数が全国最底辺にある現状を打破しようとしたことなのでしょう。しかし、10冊借りられる図書館が増えても、大幅な貸出増には結びついていません。いまだに秋田県は最下位を争っている状況で全国平均の半分くらいです。そして大館市立図書館は上限5冊でも県内では平均よりマシなくらいです。各市の館長に尋ねても10冊にして大きく伸びたという図書館はなく、反面、不都合があったというところもありませんでした。

❖利用者はどう考えているか

市立図書館では毎年度利用者アンケートを実施しています。11月に行った今年度のアンケート調査では「貸出冊数の上限について」という設問を設けました。その結果を見ると、「現状（5冊）でよい」が83%、以下「7冊」「10冊」「その他（無制限など）」を合わせても17%でした。この数字を皆さんはどう考えますか。

5冊が圧倒的なものだから現状のままでもいいのではないかと考える人も多いかも知れませんね。でも私はそうは思いません。だからこそ上限は上げるべきだと考えます。以下、私見です。

利用者の多くは、小説であろうと実用書であろうと基本的に楽しみのために本を

借りていきます。自分の読むペースと2週間という日数を勘案して、読めそうもないくらい借りる人はまずいません。もしいたらその人は図書館にとって良い利用者なのではないでしょうか。貸出冊数だけが図書館評価の全てだったら確かに助かるでしょうが、それって実に不毛な話です。では、現実に5冊以上借りたいという人はどういう人たちでしょうか。

❖大館の価値を産むために

それは主に、勉強する人、研究する人、そして表現する人たちです。言葉を換えると、アウトプットのために一次資料としての書籍を参照、あるいは読み込む必要のある人たちです。その人たちのためにぜひ上限を上げたい。なぜなら、そのアウトプット（生産）されたものがアウトカム（成果や効果）として地域に帰ってくる可能性があるからです。ちょっと想像しにくいですが、例えば司馬遼太郎が東大阪でなく大館に住んでいたら、倉本總が富良野でなく大館に住んでいたら……市税収入だけでなく、どんなに誇りに思えるか。そんな「大館というところ。」にする可能性を少しでも上げられる図書館になりたい。そのためにも、利用の幅を広げ裾野を広げたい。大上段になった感もありますが、そう私は考えます。皆さんはいかがですか。

——あれから満5年。あの大地震とやがて列島を襲うだろう大地震、それに梅原真さんに触発されたことなど、書きたいこともありましたが次に譲ります。きょうは祈りの日です。 （陽）